②愛知県の公立中高一貫校の入試はどのようなものか

7 月末に、愛知県の併設型中高一貫校の「入学者選考の概要」が発表されました。今回は、発表された内容を首都圏のケースと比較しながら見ていくことで、愛知県の特徴をつかむとともに、ご家庭での受検対策を考えてみましょう。

各校の定員と学区

2025 年 4 月開校の 4 校の定員と学区は以下の通りです。

学校名（所在地）	併設中学校の 1 学年の定員		学区
明和高等学校（名古屋市東区）	普通コース	2 学級 80 人	尾張学区
津島高等学校（津島市）	国際探究コース	2 学級 80 人	県内全域
半田高等学校（半田市）	普通コース	2 学級 80 人	尾張学区
刈谷高等学校（刈谷市）	普通コース	2 学級 80 人	三河学区

※刈谷高等学校の学区は調整区域として、大府市・豊明市・知多郡東浦町を含む

※明和高等学校の　音楽コースについては、実技検査を実施するため別途公表

〇男女合同定員なのか、男子 40 人女子 40 人なのか？

1 学年の定員は各校とも 2 学級 80 人。ということは高校からも大勢募集するということ。東京都の場合は高校からの募集を少なくしたために高校入試で併設型中高一貫校（5 校）は人気がなく、倍率が出ませんでした（最初から高校で募集しない「中等教育学校」という形でスタートしている学校も 5 校あります＜千代田区立九段中等教育学校を除く＞）。で、学校によって時期は異なりますが、2021 年度入試、2022 年度入試、2023 年度入試から高校募集を停止し、全員を中学から募集するようになりました。

愛知県が中学募集の定員を少なくしているのは、こうした東京都のケースを見ているからだと思われます。また、「中等教育学校」が 1 校もないことも愛知県の特徴です。

次に定員 80 人ということは、男女合同で 80 人、つまり合格ラインは男女同一で、学校によって男子が多くなる、女子が多くなる、同じ学校でも年度によって男子が多くなる、女子が多くなるという制度と考えられます。

これが東京都では男子 40 名、女子 40 名（実際には定員が 160 名という学校が多いので男子 80 名、女子 80 名）という制度です。この場合は男子と女子で合格ラインは違ってきます。神奈川県も東京都と同様な制度でしたが（川崎市立川崎高校附属のみ当初から男女合同定員）、2022 年度に県立の 2 校が、2023 年度に横浜市立の 2 校が男女合同定員になっています。ですから愛知県は最初から男女合同定員で行くことにしたのでしょう。

学区は「国際探究コース」の**津島**を除いて高校の学区と同様です。三河学区の人にとっては地域的に**刈谷**は通えないというご家庭も多いかと思いますが、2026 年度には**時習館、西尾**が開校する予定です。

入学者選考は面接の比重が大きい

入学者選考は、「適性検査で基本的な学力（思考力・判断力・表現力等を含む）を測り、受験者数を絞った上で面接を行う『二段階選抜（一次検査：適性検査、二次検査：面接）』を実施する」としています。しかも「一次検査通過者は、募集人員の 2 倍～2.5 倍（160 人～200 人）程度を想定」としていますから、適性検査を通っても半数以上が面接で落ちるということです。

首都圏でも二段階選抜を採用している学校はありますが（千葉県立、千葉市立、埼玉県立、さいたま市立など）、二次検査にも適性検査があるので、面接の比重はこれほど大きくはありません。面接については後述します。

適性検査は全問選択式

適性検査については下記のように発表されました。

- **小学校の教育活動を通して身に付けた知識・技能を活用した思考力・判断力・表現力等を測る。**
- **教科で区別することなく、教科横断的な問題とする。**
- **英語は出題しない。**
- **全問、選択式とする。**

上 2 つはどこの公立中高一貫校の適性検査でも共通しています。

英語の出題は、千葉市立稲毛国際中等教育学校、さいたま市立大宮国際中等教育学校など校名に「国際」が入っている学校が学校の特色に合わせて出題していますが、大多数は出題していません。

「全問、選択式」が異色です。ふつう適性検査問題というと、長い文章の読解、長文記述があります。そのため女子のほうが得意で、多くの学校が女子の応募者が多くなっています（都立小石川、千葉県立千葉など難しいところは例年男子のほうが多くなる傾向にありますが…）。

「全問、選択式」にしたのは、ここ数年全国の公立高校入試で出題ミス、採点ミスが多く問題になっていること、マークシート方式への回帰がみられることをにらんでのことと思われます。が、本来適性検査というものは自分の意見、考えを記述させることにこそ意味があるので、数年経験したのちには記述式になるのではないかと期待しています。

○適性検査は何種類行うのか？

先日の発表では適性検査を何種類行うかまでは公表されませんでした。他県のケースを見ると、ほとんどの県が適性検査Ⅰ、適性検査Ⅱの2種類を行っています。学校によっては適性検査Ⅲを行うところもあります（東京都では10校中6校がⅢまで実施）。

適性検査Ⅰというのは**文章読解と作文で主として国語力を見る問題、適性検査Ⅱは算数分野、社会分野、理科分野の融合問題であることが一般的で**す。そのため適性検査Ⅰは文字量の多い長文を速く読み、読解したこと、自分で考えたことを文章化することがふつうです。

ですから従来の適性検査Ⅰからすると選択式というのは考えられないことでした。正解がないことが適性検査Ⅰの特徴だったわけですから、多くの選択肢から正解を選ぶ方式というのは真逆なわけです。が、小6生にとってはむしろ取り組みやすいと言えるでしょう。

ただ解答は選択式でも長文が出題されることは他県と変わらないと考えられます。似たような選択肢から正解を選ぶわけですから、設問をきちんと読み、正確に読みとることが必要になります。今の子は長い文章を読む機会がほとんどなくなっています。まだ小5、小4なわけですから小学生新聞や子ども向け文庫など子ども向け文章から徐々にいろんなものをたくさん読むようにしてください。読書経験の量で差がつくとみています。

他県の適性検査Ⅰの問題文を読んでいくこともいいかと思いますが、首都圏や京都府など公立中高一貫校のレベルが高い県のものではなく、青森県など公立中高一貫校が1，2校しかない県のほうが問題文が易しいので、そうした県を選んでください。

○共通問題か、独自問題か

発表で触れられていないことに、適性検査問題は4校とも同じ問題で行うのか、一部独自問題を採用するのか、という点です。全国的には設置者が同じなら同じ問題で行うというパターンが多いです（神奈川県立、千葉県立は2校とも同一問題）。東京都は都立だけで10校もあるので共通問題と独自問題の併用になっています。適性検査Ⅲはすべて独自問題。どの学校も必ず共通問題も出題することになっています。

愛知県も2026年度開校予定の6校を含めると10校になります。そのうえ2026年度開校予定の中には普通科高校でないところも含まれているので、すべて共通問題ということはないと考えられます。またすべて独自問題ということも、作問の大変さからありえないと思います。
学校ごとに共通問題と独自問題を混ぜて実施することになるのではないでしょうか。

面接は「探究学習」についての口頭試問

「面接」という単語だけ見ると、「人物評価」のように思ってしまいますが、愛知県の公立中高一貫校における面接は全く違います。

・チェンジ・メーカーの育成や探究学習にとって重要な資質（探究心、共感力、寛容性、粘り強さなど）を見る。
・志願者の体験を基にやり取りしながら資質を見出していく「リフレクション(振り返り)型」により行う。
・導入校の教育方針やカリキュラムを理解し、中高６年間、探究学習をしっかり学び続けようとする意欲や志望動機を見る。

となっていて、小学校時代の「探究学習」についての口頭試問そのものです。

これを見た時、この面接で公立中高一貫校の志望者はかなり絞られるのではないかと思いました。東京都は 10 校どこも面接は行っていませんし、行っている他県でもここまで学習内容に踏み込んでいるケースは私の知る限りありません。この点でも愛知県は極めて特徴的です。

調査書の扱いは軽い

調査書の取り扱いについては、

調査書の提出は求めず、直近の通知表の写しを入学者決定の参考にする。

となっています。

結論から言えば、公立中高一貫校は私立中学と違い小学校時代の調査書（報告書）の比重が大きいことが一般的ですから、非常に軽いことが特徴的です。例えば東京都では、小学校５・６年の報告書の提出が求められます（千代田区立九段は小４・５・６年の３年分）。そのうえで合否を決める総合成績の比率としては、報告書が 20%～30%、適性検査が 70%～80%となっています（学校により違いがあります）。つまり調査書（報告書）の成績の良しあしで合否が大きく左右されるのです。

それからすると、愛知県は調査書を重視していないと言えます。小学校時代の様子は面接で十分カバーできるとみているということでしょう。

小学校での授業中の態度や提出物、テストの結果に神経を使わなくていい点は、本人、ご家庭にとってはありがたいかもしれません（もちろん適性検査で高得点を上げるには授業内容を 100%ものにすることが大切）。私立中学を併願する受験生にはこれは幸いなのではないでしょうか。

以上のように、愛知県は公立中高一貫校の先進県とはいろいろな点で大きく異なっています。先行する県の入試をいろいろ研究することで今回の形になったと思われます。これからより具体的な入学者選考方法、各校の教育内容が公表されますので、それらを十分理解したうえで対策をしてください。

適性検査対策は親子の生活ぶりが肝心

学習面では教科ごとの基礎学力をきちんとつけたうえで、適性検査の形式に慣れることが大切です。そのためにも早いうちに他県の適性検査問題を眺めるだけでもしてみてください。お子さんができそうな易しいものがあったら挑戦してみてもいいでしょう。

また、生活面では新聞やニュースを一緒に読んだり見たりするなかで、社会で起こっている問題に関心をもち、意見を言い合ったり、解決できないかを考えたりすることを習慣化してください。最初はうまくいかないかもしれませんが、投げ出さず少しずつ経験を積み重ねていくことが大切です。

お子さんが「探究学習」で打ち込んでいることがあれば、それがさらに発展するようサポートすることも極めて有効です。対象となる場所があれば一緒に出かける、参考となりそうな図書を探す、ネット上に参考となる材料があればアクセスの仕方をアドバイスする……保護者ができることはたくさんあるでしょう。

公立中高一貫校の入試ほど、下記に当てはまる受験はありません。

「塾、テキストだけが受験勉強ではない。生活こそが親子でやる受験勉強」